

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (1)

——手あそびについて——

中 西 智 子

A Research on Infant's Learning Process about Songs

Satoko NAKANISHI

は じ め に

幼児にとって“うたを歌う”“うたが歌える”ということは、この上もなく楽しいことであり嬉しいことのようなものである。それは、幼児が気分の良い時など、スキップしたり急ぐ必要もないのに走ったりするのに似ているのではないだろうか。気にいったら積極的に自分から行動して、幼児なりにモノにしてしまうようである。

一般的に幼稚園という集団の中にいる時、先生から誘われたり友達の歌声に刺戟されたりと歌う機会は多いのが常である。そして、同じ曲を意識して歌ったり、あるいは知らず知らずのうちに口遊くちずさんでいたり、幾度となく歌っていることであろう。1日だけであったり1週間続いたり期間様々であっても、その間の繰り返した“歌うこと”の学習効果は多少にかかわらずあると考えられる。

このように、日常的な生活の中での音楽的な行動によって身に付いた能力は、しばらくの間歌わなかった場合には歌っていた頃に比べて歌唱力にどのような変化が見られるだろうか。それは幼児が歌えるようになった習得過程となんらかの関係があるだろうか。

本研究では、5歳児を対象にして、指導者に教えてもらいながら歌えるようになっていく習得過程と、一ヶ月後に歌えた状況を比較して考察したい。

1 歌唱指導の比較

幼児は何か気に入ったと感じる歌は即座に歌ってみたくなるようで、覚えた部分から歌っている。それが幼稚園や保育園で仲間と一緒に歌う場合であると、指導者の歌声とは別に、自分の周辺の子の歌声が相互に影響しあい、各人が歌を覚えるのに役立っているようである。時として歌詞が違っていたり、リズムが違って伝え合うことはあるが、間違いを正してあげる子どももいる。また、先生に教えてもらった歌やテレビで覚えた歌などから、気に入った歌を一人でも友達とでも何かの折りに歌ってみたりすることもあって、歌うことが遊びのなかに在る場合にも子ども同士で教え合う姿を見掛けることがある。

いずれの場合も、幼児が歌を楽譜どおりに歌わなければいけないという観点ではなく、幼児が歌ってみたくなるような内発的な動機によって歌うことは、幼児が自主的に音楽を楽しんでいるという事実であり、このことは教育的な観点において重要であると考えられる。

以上のことから、幼児期の音楽教育の立場で、＜幼児の自主的な行動として歌うことが位置

づけられるような歌唱指導の方法で、歌の習得過程に相違があるだろうか。あるとすればその相違はどのようなものなのか」という課題が生じる。

そこで、幼児が歌を覚えるための手助けや手立てとなりえる可能性を、以下の3種の歌唱指導について考察した。

・3種類の指導条件

- 1 歌いながら手遊びをする指導
- 2 歌いながらリズム運動のように身体を動かす指導
- 3 人形劇の映像にテーマソングを流すのみ

・指導のプログラム

三重県下M保育園園児5歳児全員 46名（男児20名、女児26名）を対象にする。

M保育園は3、4、5歳児の縦割り保育をして3クラスに分かれているので、3クラスのメンバーをそのままA、B、Cグループとした。

Aグループ 16名（男児6名、女児10名）

Bグループ 15名（男児9名、女児6名）

Cグループ 15名（男児5名、女児10名）

表1 指導のプログラム

指導の条件、曲名	有；グループ	無；グループ
手遊び、ラッパの小びと トントントンはいってますか	a;C b;A	a';A b';C
リズム運動、ピノキオの歌 やぎさんとかけっこ	c;C d;B	c';B d';C
映像、たろうのともだち ぼくはかえるさ	e;B f;A	e';A f';B

・実施時期 1989年8月～9月

尚、f;Aの子どもたち、即ち、人形劇を見る子どもたち以外には歌詞を書いた大きな紙を指導者の横に提示した。

・指 導

歌唱指導はプログラムどおりに3日続けて行う。そして、幼児が歌っている状態を毎回VTRで収録する。

毎回（3回）の指導後に、幼児の歌声を個別に録音し、それを採譜する。さらに約1ヶ月後に、グループ毎に全員で1回歌ってその2日後に4回目の個別の録音をして採譜する。

・課 題 曲

「ラッパの小びと」まどみちお作詞 湯山 昭作曲（楽譜1）「トントントンはいってますか」伊藤アキラ作詞 越部信義作曲（楽譜2）「ピノキオの歌」東 康介・山本澄子作詞 田中正史作曲「やぎさんとかけっこ」吉岡 治作詞 小林亜星作曲「ぼくはかえるさ」小春久一郎作詞 高橋定一作曲「たろうのともだち」は「わらべうたであそぼー」コダーイ芸術教育研究所編 明治図書出版 1971年から選曲

手遊びをしながら歌う曲は、「ラッパの小びと」と「トントントンはいってますか」で、そ

の遊び方は図1、図2である。

・考察の手順

個別に採譜したものを歌詞、リズム、旋律線について、歌詞の単位毎に、あるいは最小のフレーズ毎に正誤表を作成した。正誤表をもとにして、幼児が曲のフレーズ毎にどのように歌って習得していくのかを調べた。又、曲を全体的にどのような理解で歌っているのかについて検討した。

ただし、指導の時には仲間と共に歌っていても、個別の録音時には「イヤ」で歌わない子、「おねえちゃんと一緒にだったらええよ」で歌った子の採譜は外す。

そして、指導の条件の有るグループと無いグループ（例えば、aとa'、bとb'のように）の2つのグループの歌声を課題曲別にランダムに編集し、そのテープを6名が5段階で評価した。


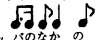



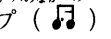
1 手遊びについての考察

・1日目の指導を終えて

手遊びをしながら歌った子と手遊びをしないで歌った子の正誤の結果は表2の如くである。

表2 正誤表からの結果と5段階評価の平均点





		1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
歌 詞		a=a' b>b'	a=a' b<b'	a>a' b>b'	a>a' b>b'
リ ズ ム		a<a' b>b'	a>a' b<b'	a>a' b>b'	a>a' b>b'
旋 律 線		a=a' b>b'	a=a' b<b'	a>a' b=b'	a>a' b=b'
5 段階 評価	a	3. 32	3. 21	2. 96	3. 60
	a'	2. 87	3. 54	3. 71	3. 20
	b	3. 06	2. 75	3. 69	3. 63
	b'	2. 56	3. 63	3. 56	3. 94

表2の正誤表によれば、1回目に「ラッパの小びと」を歌ったa;手遊びをしたグループとa';手遊びをしなかったグループを比べた場合、リズムではa<a'で手遊びをしなかったグループの方が正しく歌っていた。しかし、歌詞や旋律線においてはaとa'の差は見られなかった。例えば、1小節目  のリズムを正しく歌ったのはa>a'であった。間違いの方の傾向としては、aは  が多く、a'では 、、、などのように、a'はスキップ（）のリズムを八分音符で歌っていた。

歌詞については、図5の如くa、a'共に、1小節目の「ラッパのなかに小びとが」を「ラッパのなかの小びとが」と勘違いしている。歌詞を書いた紙で確認をとりながらの歌唱指導であったが、個別の録音時に歌った歌詞の方が幼児には歌い良いのであろう。おそらく、幼児は「……の……」という言葉使いが日常的に多いからと思われる。

幼児にとって使い良い言葉には、その言葉のリズムやアクセントから生まれる習慣的な語呂

の良さがあり、その日に始めて出合った歌のリズムと馴染まなかったのではないだろうか。





リズムについては、2小節目  のリズムを正しく歌ったのは a < a' で、間違い方の傾向としては、a は 、a' では 、であり、a と a' 共に、2人ずつ 、となって1小節4拍子のうちの3拍目、4拍目を飛ばして2拍の小節になっている。1小節目と同様に a' はスキップのリズムを八分音符で歌う傾向がある。このことは、「ラッパの小びと」の特徴的なスキップのリズムは、唯歌うだけでなく手遊びのように身体の一部を動かすことで歌のリズムに“ノリやすくなる”のではないだろうか。

a と a' が3、4拍目を飛ばしたことについては、始めて出合った音楽で歌い慣れていない場合、歌詞（言葉）の無い休符の部分、内的聴感覚で音楽の流れを感じるのは幼児には難しいということであろう。拍子を合わすことに4人の意識は向かなかったようである。

旋律線については、図11の如く a と a' の差はあまり見られなかった。4から5小節にかけての歌詞「すんでいるのー」で正しく音程がとれたのは、a に2名で a' はいなかった。6小節、7小節、8から9小節にかけては a' に各1名ずついたが、a には8から9小節のところまで1名であった。このように、部分的にでも習ったその日に正しい音程で歌うのは難しいようである。

「トントントンはいってますか」を歌った b の手遊びのあるグループと b' の手遊びをしなかったグループを比べた場合、歌詞、リズム、旋律線の全てにおいて b > b' で、手遊びをしなかったグループの方が間違いが少なかった。

歌詞については、図15の如く17小節目の「はいっているかな」を正しく歌えた子は b、b' ともにいなかった。「はいってるかな」と勘違いをして歌った子は図17の点線のように、b と b' の差はあまりなかった。また、3小節目の「おなかに」を「おなかのなかに」と歌った子がいたように、幼児は歌詞を聞き取る手掛かりとして、自分が普段使う言葉で納得しながら記憶していくのではないだろうか。しかし、図15に見られるような b と b' の小節毎の正誤の差があるのは、手遊びが初めての歌の歌詞を覚えるには役立つということであろう。

リズムについては、1、7、19小節目の  を  で歌った子が b にいたが b' にはいなかった。一方、b' には4小節目の  と  と歌った子がいたが b にはいなかった。このことは、幼児は歌の捉え方がリズムより歌詞に注意が向いているからではないだろうか。そして、手遊びの方法が歌詞の内容に具体的であったことで、b は手遊びをしながら歌詞が覚え易く、1拍出遅れても次に支障なく歌える程にリズムを習得できたのであろう。手遊びをしなかった b' はどこか一ヶ所出遅れたり間違えて歌うと、次からズレて歌ってしまうようである。

旋律線については、b と b' 共に歌っているというより、リズムにのって歌詞を言っているようである。部分的には歌っているが、処所はリズムにのって歌詞を言っているような子もいて、小節毎の正誤を比べれば全体的には b > b' である。これは、例えば図23の如く2、8小節目の「はいってますか」は b の半数の子は歌えているのに比べて b' にはいなかったが、1小節目の「トントントン」では b < b' であった。

例えば、a の子の間違い方で2小節目の F から A の音程が狭い場合を含むと図23の点線の如くに7割の子が歌えている。このように手遊びをする方が始めて出合った歌のフレーズを捉えるには効果があるのに比べて、歌い始めには手遊びの効果は見られなかった。

歌声による5段階評価では、「ラッパの小びと」「トントントンはいってますか」のどちらも

手遊びをしながら歌ったグループの得点が高かった。習いたての歌を一人で歌うことに抵抗感のある子やハッキリ拒否する子もいたが、「歌ってみてくれるかな」で「うんいいよ」とテープに録音できた子に限っての考察になった。どの子も自信なさそうな声で歌っていたが、 $a > a'$ と $b > b'$ の結果からは、みんなで一緒に歌った時の手遊びの感覚が、一人で歌う時に歌を思い出す手助けや手立てとして役立ったと考えられる。

・ 2 日目の指導を終えて

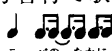
2 回目の録音結果から「ラッパの小びと」では、歌詞と旋律線については $a = a'$ で、リズムは $a > a'$ であった。

歌詞については、図 6 の如く 1 回目比べて正確に歌えるようになった子が増えた。特に、 a の手遊びをしながら歌った子は、2、3、4、小節を全員が正確に歌った。 a' の手遊びをしなかった子は全員が正確に歌った小節はなかったが、各小節で 1 人か 2 人が間違えた程度で歌った。


1 小節目の「ラッパのなかに」を「ラッパのなかの」で歌っている子が a と a' にまだいるが、あらたに「なかを」「なかー」と歌う子が a' にいた。小びとの 5 人の名前べべ、ププ、パパ、ピピ、ポポを間違わずに歌えるのは $a < a'$ で、手遊びをしないで歌った子の方に多かった。

このように、2 日目の正誤表で歌詞について手遊びの効果があまりみられなかったのは、幼児に〈歌〉を教えてもらっているという意識と〈手遊びの歌〉を教えてもらっているという意識の差があるのではないだろうか。歌だけを教えてもらう場合は歌を覚えようとして歌詞に集中して注意が向き、手遊びをしながら歌う場合は手遊びの方法と歌詞に注意が分散すると考えられる。

リズムについては、図 8 の如く 2 日目に手遊びをして歌った a の子は手遊びをしなかった a' の子に比べて正確に歌える小節が多かった。

a' の子の歌のリズムは微妙なところで正確でなかった。例えば、 a で 1 小節目を歌えなかったのは 2 人で、その 2 人共にスキップのリズムが八分音符になっていたのに比べて、 a' の子は正確に歌えたのは 1 人であるが八分音符で歌った子はいなくて、始めの 1 拍を四分音符でなく八分音符と八分休符であったり、 と 2 拍目と 3 拍目にシンコペーションがついて歌っている。 a' の子がこのようなリズムカルな歌いかたをしたということは、音楽にノリを感じて歌えるまでに習得したと考えられる。

また、5、9、13 小節の楽譜に忠実に歌えたのは a' より a の子が多かったが、 a' の子は全音符を付点 2 分音符と四分休符にしたり、付点 2 分音符を 2 分音符や 4 分音符にして声をのばさずに間違っている。このように、 a' の子には声をのばす所が正確ではない面が目立つ。これは例えば 13 小節については、12 小節目の「かたまってねてる」では全員が正しく歌っていることから、12、13 小節を 1 つのフレーズとして感じて、その勢いのような感覚で歌っているために終わりの長い音への意識が薄くなったのであろう。同様に 4、5 小節や 8、9 小節も考えられる。

2 小節目の二分休符は 1 回目のように飛ばして歌った子はいなくなり、 とさいごの音符を伸ばして子どもなりに歌い易く変えてある。この傾向は a 、 a' 共に共通である。このことは、2 日目の指導によって徐々に拍子感覚が芽生え始めたと考えられる。

1 回目と 2 回目のリズムの習得率の比較で a が高かったのは、1、2、3、4、5、8、10、13 小節であり、 a' が高かったのは、6、7、9、11、12 小節であった。 a は歌の始まりか

ら習得していくようであり、a' は印象的なリズムや紛らわしくても興味のある歌詞を含むフレーズを先に習得していくようである。



以上のことから、歌唱指導の2日目の少し歌い慣れた時点で、手遊びをしたグループにスキップのリズムの効果が表れなかったのは、手遊びの動きが拍にそっていたため、に幼児は手遊びをしながら拍の感覚を習得したと考えられる。この時点では拍に合わせてスキップのリズムで歌うことは難しいのであろう。

旋律線については、1回目は全員が歌うというより覚えた歌詞を言っているといった状態であったのに比べて、図11の如く2回目では歌詞が旋律にのって部分的にでも歌えている子が現れた。例えば、1小節目のCとFの完全4度音程を狭くとったり、Aの音がGの音になったりしながらも歌らしく聞こえるようになった。幼児は歌のアウトラインのようなものをつかみ始めたようである。

「トントントンはいってますか」を歌ったbの手遊びのあるグループとb'の手遊びをしなかったグループを比べた場合、歌詞、リズム、旋律線の全てにおいて $b < b'$ で、手遊びをしないで歌ったグループの方が間違いが少なかった。

歌詞については、1回目と同様に17小節目はb、b'共に「はいっているかな」とは歌わず「はいってるかな」であった。「はいってるかな」と歌った子は図16の点線の如く $b > b'$ であり、1回目よりb、b'共に増えている。図16の如く、1～12小節まではb、b'共に歌詞を間違える子は殆どいなかったが、それ以降bの子はb'の子にくらべるとよく間違えた。1回目に比べると、b、b'共に歌詞を自分の言葉ではなく指導者の歌声や歌詞を書いた紙を参考にして歌うことができるようになったと考えられる。

2日目になれば幼児は歌詞を覚え始めたようで、歌詞を覚えたことが歌えることにつながり、それが歌う自信となったようである。手遊びをしながら歌った子は2日目の時点では、歌を覚えることより手遊びをより正確に覚えようとしたのではないだろうか。手遊びをしなかった子は歌に集中できたのであろう。

リズムについては、図20の如く12小節目まではb、b'共にリズムはよくとれていて、間違える子はそれぞれの小節に1人或2人である。しかし、13小節から終わりまでは間違える子がめだった。b、b'共にスキップのリズムを八分音符で歌う子はいなくなったが、2、8小節のリズム、を に歌った子がbに2人いた。この2人は2、8小節のどちらかは正しく歌っていることから、歌えないのではなく、手遊びのこともありうっかりして話し言葉のリズムで歌ってしまったのであろう。そして、この2人はのびた音を休符で補い、その小節内で時間的な処理をしている。このように小節内で辻褃を合わせることができるには拍子感覚と歌える気持ちの余裕が必要であり、即ち、これは2日目の学習効果の結果といえる。

拍子感覚の学習効果については、12小節目の3拍の休符を1回目の時に正確に休んだ子はb、b'共に半数であったのに比べて、2回目では全員が正確であったことから推察できる。

最後の小節の20小節目は2、8小節目と同じリズム・同じ歌詞であるが、b、b'共に20小節目のリズムを間違えた子が多かったのは、旋律が2、8小節と異なることが原因と思われる。

旋律線については、b、b'共に1回目では歌っているというより歌詞を言っている状態の歌声であったのに比べて、2回目には歌としてのまとまりが強く感じられるようになった。

20小節目のリズムの習得が良くなかった原因は、歌詞・リズムは同じでも歌い易いフレーズと歌にくいフレーズの差は旋律の動きにあると考えられる。即ち、「はいってますか」の言

葉の意味を質問の意味「はいってますか?」の意味で理解していた子は、2、8小節の旋律線のように「か」の音を長3度上げる歌い方が自然に感じたのであろう。しかし、幼児は20小節目のような第一声を高くアクセントをつける話し方をすることから、20小節目の旋律線の動きには気付いていたようである。気付きながらも完全5度の音程で音を下げるのは難しいのか、音が下がりきらなくて間違っただけの子が多かった。

2日目になると、図24の点線に見られるように正確ではないが旋律の動きを線として追った場合、正しい旋律線に近い動きをしている。この傾向はb'に強いことから、手遊びをしないで歌ったグループの方が歌の把握ができていと考えられる。

歌声からの5段階評価では、「ラッパの小びと」「トントントンははいってますか」のどちらも手遊びをしないで歌ったグループの方の得点が高かった。2日目の指導後には歌の記憶は確かでなくともどうにか歌えるようになり、幼児の歌声に勢いが出てきた。

手遊びをしながら歌った子は、歌うことと手遊びをすることのどちらも少し慣れている程度のために、歌うことに集中できなかったのだろうか。手遊びをしないで歌った子は、歌うことに気持ちが集中できたために歌の習得が良くなったと考える。


・ 3日目の指導を終えて

3回目の録音結果から「ラッパの小びと」では、歌詞、リズム、旋律線のいずれもa>a'であった。

歌詞については、aの手遊びをしながら歌ったグループもa'の手遊びをしないで歌ったグループも、1小節目を「ラッパのなかの」と歌う子がいたり、5人の子びとの名前を間違ったり、11小節目の「くだのおくで」を「くだもおくで」「くだのなかで」「くだのうえで」のような間違いをした。しかし、図5の如くaの方が間違わずに歌えた子が多かった。a'の子が2回目より歌えなくなっているのは、比較対象児が4名と少なかったうえに、そのうちのいつも積極的に歌っていた男児が3回目の録音の時に気分がのらなくて歌わなかったことが影響していると思われる。

歌の歌詞は幼児には歌う言葉として認識されていくようで、特に日常使っているような言葉(歌詞)が歌のなかにあるときには使い慣れた言葉で歌う傾向が強いといえる。

リズムについては、図9の如くaのグループがa'より全体的には間違わずに歌えるようである。

2小節目のリズムはa、a'共に全員が  に定着してしまったかのようで、指導の時には二分休符がとれている子も一人で歌うと休符の感覚が保てなくなっている。

旋律線については、図15の如く2回目にくらべて小びとの名前のフレーズを部分的に正確に歌える子が増えた。そして、aの子は4、5小節、9、10小節のフレーズも歌える子が増えている。

どの子も着実に歌えるようになってきた。例えば、手遊びをしながら歌った男児の3回目の歌声を採譜した楽譜4と彼の2回目の歌声の楽譜3と比べた場合、「ラッパの小びと」のおおもとにずいぶん近づいていることがわかる。もっと上手に歌える子は多いが、この男児は歌を習得していく過程がグループのなかで平均的なようである。

「トントントンははいってますか」を歌ったbの手遊びのあるグループとb'の手遊びをしないグループを比べた場合、歌詞、リズムはb>b'で、旋律線ではbとb'の差は見られなかった。

歌詞については、図17の如く17小節目の覚え違いは直らずに、「はいってるかな」と歌っている。しかし、「はいってるかな」と歌った子も含めて点線で示した折線からは、図15の1回目、図16の2回目そして図17の3回目へと少しずつ歌が歌えるようになった習得過程がわかる。

手遊びをしながら歌ったグループは3日目には歌詞の間違ひは少なかった。間違ひ方としては、18小節目を「はいってないかな」と歌うように17小節の「はいっているかな」に対しての言葉で、思わず出た言葉であろう。同様な間違ひはb'の手遊びをしなかったグループにもみられ、b'ではさらに17小節目を「いないかな」18小節目を「はいってるかな」と順番が逆になった子がいた。どちらのグループも歌詞の間違ひでは、幼児は自分の使い勝手の良い言葉で歌っていることがわかった。

リズムについては、bの手遊びをしながら歌ったグループは13、14、15、16小節のリズムの習得が良くなり、歌全体がまとまってきた。b'の手遊びをしなかったグループも歌としてのまとまりが感じられるようになった。図20と図21の如く13小節～16小節にかけてはb、b'共に歌い辛い箇所なのである。このことは歌詞の言葉と関係しているのではないだろうか。例えば、幼児が「とても」と言う時の言葉のリズムは13小節目のリズムでは無理があり、幼児にしては無意識のうちに自分の言葉のリズムを選択して歌ったのであろう。

リズムを正しく歌うことと歌詞を正しく歌うこととの関係を図の折線で調べると、例えば、図15と図19、図16と図20、図17と図21のように似た形になっていることがわかった。このことは、幼児が歌うときに一番注意の向く歌詞はリズムと密接な関係にあることを示していると考察できる。

旋律線については、例えば、楽譜6から楽譜9の4枚の楽譜のように、正しい音程ではないがまったく違った音程で歌っているのでもない、という状態の歌声の場合が1回目より2回目そして3回目と回数が増える毎に多く見られた。

歌の覚え始めに手遊びをしたかしなかったかということは、3日目のように歌い慣れてきた頃には旋律線に影響は見られない。しかし、1日目のように始めて出合う歌を習得するには効果が表れている。

歌声からの5段階評価では、「ラッパの小びと」は手遊びをしないで歌ったグループの方が得点が高くその差は大きい。一方、「トントントンはいってますか」は手遊びをしたグループの方が少し得点が高くなった。

3回目の歌唱指導になると、手遊びをしながら指導するグループの子のなかには手遊びをしないで歌だけを歌っている子が増えて、1回目のように手遊びをすることを楽しんでいる子は少なくなった。指導者と一緒に手遊びをしながら歌っている子や指導者の手遊びを見ながら歌っている子などさまざまであった。即ち、歌が気に入った場合には＜手遊び付きの歌＞が手遊びから解放されて＜歌＞へと変わるのではないだろうか。

2 一ヶ月後の歌唱能力

1 「ラッパの小びと」について

一ヶ月後の幼児は図6、10、14の如く、歌詞、リズム、旋律線についてaの手遊びをした経験のある子の方が正しく歌えた小節が多かった。このことは、しばらく歌わなかった歌を思い出す手掛かりとして手遊びの経験が役立ったものと考えられる。

歌詞については、一ヶ月前には間違えやすかった6小節目から9小節目にかけての5人の小

びとの名前を正しく歌える子が増えたり、11小節目の「くだのおくで」を正しく歌えるようになっていた。このように、一ヶ月後に歌えるようになる傾向は a、a' にみられた。

日常の慣習的な言葉に影響されることなく、歌の言葉としての歌詞に馴れてきたのではないだろうか。

リズムについては、a の手遊びをしたグループと a' の手遊びをしなかったグループ共に、2小節目の二分休符がとれて正確に休めて、一ヶ月前に比べると正しく歌える子が増えている。

一方、悪くなっているのは 5、9、13小節のように音符をのばして歌うところである。間違い方は a、a' に共通して二分休符で 3 拍目と 4 拍目を休んでいる。しかし、休符を入れても 1 回目のように小節が縮まることがないので、幼児は各自が感じる歌の雰囲気や歌っているのだろう。

旋律線については、a の手遊びをした子の方が正しく歌っている。しかし、2、3、4、11、12小節目の旋律は歌いにくいようである。3 回目の時に正しく歌えた子が歌えなくなっていた。3 度と 4 度の音程で上行、下行の音程の連続は幼児に難しいようである。

歌声からの 5 段階評価では、手遊びをした子の方の得点が高かった。歌を音楽的なまとまりとして記憶に残すには、歌を歌いながらの手遊びの経験は役に立つのだろうか。

一ヶ月ぶりに会った幼児は「ピノキオの歌」を歌たいと言ってきた。表 1 の指導のプログラムによれば、歌唱指導を受けてない曲である。「ラッパの小びと」を手遊びなしで歌唱指導を受けたグループの子が「ピノキオの歌」を歌おうと誘ってきたことは、指導者からではなく、友だち同士で教え合っていると考えられる。彼等は歌詞を書いた紙の前に集まって元気に歌っていた。

「ラッパの小びと」を指導者が「一緒に歌ってみようね」と言った時に、「あかんあかん」「先生歌わんといて」「それ（歌詞を書いた紙）なしで歌えるよ」などと口々に言ったことから、幼児は歌うことに自信をもっていた。歌詞を覚えていることが嬉しいようで、自慢のようであった。

そして、歌の合間に「たろうのともだち」を歌ったりと、幼児は歌える歌を次々に聞いて欲しいようである。さらに、歌えることを指導者に知って欲しいのであろうか、1 人が大きな声で歌いだしたら、他の子たちも大きな声を出し始めて、まるで“どなる”ような声で愉快そうに歌っていた。

これらのことから、時には幼児の遊び仲間のなかで歌うことの情報が流れ、仲間から教わることがあると考える。

2 「トントントンはいってますか」について

一ヶ月後の幼児は図 18、22 の如く、歌詞、リズムについては b の手遊びをした経験のある方が正確に歌えたようである。しかし、旋律線については手遊びの効果は見られない。

歌詞については、17小節目を b' の女兒 1 人が「はいっているかな」と正確に歌えた以外は、図 18 の点線のように、全員が「はいってるかな」で歌った。b、b' のどの子もしっかりした声で歌っていた。

リズムについては、歌詞を正しく歌える程にリズムも正しく歌えていた。即ち、歌詞を間違えたところのリズムが間違っているのである。ただし、17小節のリズムは間違えた歌詞のリズムと一致するので、正しくリズムがとれていた。

旋律線については、一ヶ月前に比べると音程が少し安定しているようである。正しい音程で歌える子が少しであるが増えている。

19小節目のCの音から20小節目のFの音へ、完全5度で正確に下げて歌えるようになった子がb、b'共に増えた。

楽譜9のように、聞いているとそれらしく聞こえるが、歌声を採譜したのを見れば随分音程感覚があいまいであることがわかる。しかし、点線で示したように、b、b'共に本来の音程に近い音程で歌えるようになった子が増えた。

歌声からの5段階評価では、b'の手遊びをしてない子の方が高い得点であった。歌声を楽譜にして評価するのではなく、歌声を聞いて評価した結果が $b < b'$ であるということは、幼児が歌う時の心意気のようなものの差と考えられる。歌詞、リズムでは $b > b'$ でありながら、音楽的なまとまりにおいて $b < b'$ になったのである。即ち、b'の子はbの子よりこの歌をモノにしているといえよう。

「トントントンはいってますか」を歌った子たちは、手遊びをする子もしない子も1回目の録音の時から採譜しやすかった。それは、＜歌えている＞小節があったからである。例えば、楽譜6の女兒のように、特別良く歌えた子ではないが、歌詞をリズムにのせて言っているなかにも旋律ののって歌っている部分が聞きとれた。

歌えるには歌詞を覚えることが大事な条件の1つであるが、歌の印象をつかむことも歌えることの条件になる。この課題曲の場合は、歌詞がリズムと一致しているので歌を覚えやすかったようである。1回目で少し歌えるようになると、手遊びのないグループでは課題曲にない「ヘーイ」「ヘエイヘエイヘエイ」などと掛け声を入れる男児がいたり、「トントントン」の歌詞に合わせて飛び上がる男児もいた。このように、幼児は自分で歌のイメージ作りをしていたのかもしれない。また、2日目では歌詞を自分で意識して「はいってますか」を「はいってません」と違う言葉に替えて歌う男児がいた。

一方、手遊びをしながら歌ったグループでは、1日目には手遊びをしていたが2日目になると手遊びをする子が少なくなった。1ヶ月後には拍子を取りながら歌う子がいた。

この課題曲を幼児は1回目の時に覚えたつもりになっていたのではないだろうか。幼児が歌えると思っている基準になるものは、歌詞を覚えたかどうかにかかっているようである。2回目の指導では、幼児は歌詞を見ないで歌うことを意識して横を向いて歌っていた。

以上のような状態から一ヶ月後には床を叩いて歌ったり「ヘイ！」を入れたり全員がとても楽しそうに歌った。そして、この時の歌の完成度が最も高かった。

お わ り に

一ヶ月後には全ての3グループで、課題曲として習った（一人4曲）以外の歌をも歌いたいと言いだした。他のグループが歌ったのを「知っているから歌いたい」「歌えるから聞いて欲しい」と思うのか、頼りなくおぼつかない歌声ではあるが、歌詞を書いた紙を見ながら嬉しそうに歌っていた。この時が一番盛り上がった雰囲気になった。

子ども同士で教え合うのか、友だちが歌っているのを聞いて覚えたのか、この一ヶ月の間に歌が幼児の身近に在ったことは事実のようである。

最初に耳にした歌の印象がどの位魅力的であるかと言うことが、その歌の習得に影響を与え

るようである。それは友だちの歌う姿であったり、指導者の働きかけである。そして次に位置するものとして、手遊びやリズム運動や映像であろう。

歌を“自分のモノにする”という過程で必要なことに、時間があげられる。覚えた歌をより一層完成度の高いものに熟成するには、時間のはたす役割りは大きいといえよう。

今後、時間をかけることの意味について音楽教育の視点で研究を進めてみたい。

付 本稿は1990年日本保育学会全国大会で口答発表したものにさらに詳しい検討を加えてまとめた。

楽譜1 トントントンはいってますか

伊藤アキラ 作詞
越部 信義 作曲
伊藤 嘉子 編曲

イワノ 裕子 編曲

F#dim7 C7 F C7 F

1.2. トントン トン

はいてますか

6 C7

{ お な か に - } { ご ち そ う - } はいって ます か トン トン
 { ポ ス ト に - } { お て が み - }

[illegible]

はいてますか トン トン トン トン とも すきなもの トン トン とも

F Gm C7 F
 へんなもの はいっているかな いないかな トントントン はいってますか

楽譜2 ラッパの こびと

かわいらしく、軽やかに (♩ = 116ぐらい)

まど・みちお 作詩
湯山 昭 作曲

mp leggiero *mf* *mp*

1. ラッパの なかに こびとは
2. ラッパを ふくと こびとは

なんにんなんにん すんでい の バベとブと
なんにんなんにん とんでで の バベとブと

ババとビビと ポポの ごにん
ババとビビと ポポの ごにん

mp

ぐ る る ま い た く だ - の お く で か た ま て ね て
 そ ら ま で い - っ て き ん - の つ き を か た い て あ そ

mp

* * * *

1. 2.

る ぶ

1. 2. *poco rit.*

mp *ppp*

* * * *

ラッパの こびと
 まど・みちお

ラッパの なかに こびとは
 なんにん なんにん すんでいるの
 ベーと
 プアと
 ババと
 ビビと
 ポポの 五にん
 ぐるぐるまい たくだのおくで
 かたまつて おでる

ラッパをふくと こびとは
 なんにん なんにん とんでるの
 ベーと
 プアと
 ババと
 ビビと
 ポポの 五にん
 そらまでいって きんのつきを
 たないて あそぶ

楽譜3 「ラッパの こびと」

2回目 7月31日収録
a グループの男児
(1回目の収録はでき
なかった)

ラッパの なかに こびとはー なん にんなんにん
すんで いる の プブと
パパと ピピと ポポの # ごとに ん
ぐるぐる まいた まって ね て
る

楽譜4 「ラッパの こびと」

3回目 8月1日収録
a グループの男児

ラッパの なかに こびとはー なんにん なんにん
すんで いる の ベベと プブと
パパと ピピと ポポの ごとに ん
ぐるぐる まいた くだー も おくで かたまって ね て
る

楽譜 5 「ラッパの こびと」

4回目 8月31日収録
a グループの男児

ラッパの なかに こび とは なん にん なん にん
すんで いる の プブと
パパと ピピと ポポの ご に ん
ぐるぐる まいた くだー の おくで かた まって ねてい
る

楽譜 6 「トントントンはいってますか」

1回目 7月31日収録
b グループの女児

トントントン はいってますか
ごちそう はいってますか トン トン
トントントン はいってますか あたまに おはなし
はいってますか トントントン トントンとっても もの トン
もの はいってるかな いないかな か

楽譜7 「トントントンはってますか」 2回目 8月1日収録
bグループの女兒

[illegible]

楽譜 8 「トントントンはいってますか」 3回目 8月3日収録
bグループの女兒

[illegible]

楽譜9 「トントントンはいってますか」 4回目 8月31日収録
bグループの女兒

[illegible]

図1 「ラッパの小びと」の手遊び

① 「ラッパのなかに」



口のところに両手をもってきて
ラッパをふくまねをする

② 「こびとは」



手の小ゆびで
「こびと」を表現し、
両手を左右に
振る

③ 「なんにん なんにん すんでいるの」



右手の
人指し指を1本たてて 左から右へ1指ずつ腕を動かしていく
4拍動かしたら 今度は右から左へ動かす
(同じ動作を12拍行う)

なんにん なんにん
すんでいるの

④ 「ベベとプブと パパと ビビとボボのごにん」



(一回目)



プブと

2回手拍子を打つ

パパと

ボボの

んー

(二回目)

(三回目)

(四回目)

(同じ動作を4回くり返す)

1回ひざをたたく

ビビと

ごに

んー

⑤ 「ぐるぐるまいた くだのおくで」



胸の前で腕をぐるぐると外まきに回す
(8回まわす)

⑥ 「かたまって ねてる」



かたまって (左)



ねて (右)

頬に両手を合わせて
寝ている姿を表現する
左・右・左・右と同じ動作を
繰り返す

るー (左・右)

図2 「トントントン はいってますか」の手遊び

- ① トントントン
はいってますか



右手のげんこつで3回ずつ
ノックする

- ② おなかにごちそう
はいってますか



両手でおなかを6回たたく

- ③ トントントン



右手のげんこつで
2回ノックする

- ④ トントントン
はいってますか



右手のげんこつで3回ずつ
ノックする

- ⑤ あたまにおはなし
はいってますか



両手で頭を軽く6回たたく

- ⑥ トントントン



右手のげんこつで
2回ノックする

- ⑦ トントントンとても



両手のげんこつで
4回ノックする

- ⑧ すきなもの



両手を胸で交差させる

- ⑨ トントントンとても



両手のげんこつで4回ノックする

- ⑩ へんなもの



うで組みをする

⑪ はいっているかな



右手をひらき顔の前から右へ
ずらす

⑫ いないかな



左手をひらいて顔の前から左へ
ずらす

⑬ トントントン



両手のげんこつで3回ノックする

⑭ はいってます



両手で顔をかくす

⑮ か



両手を左右にひらいて顔を出す

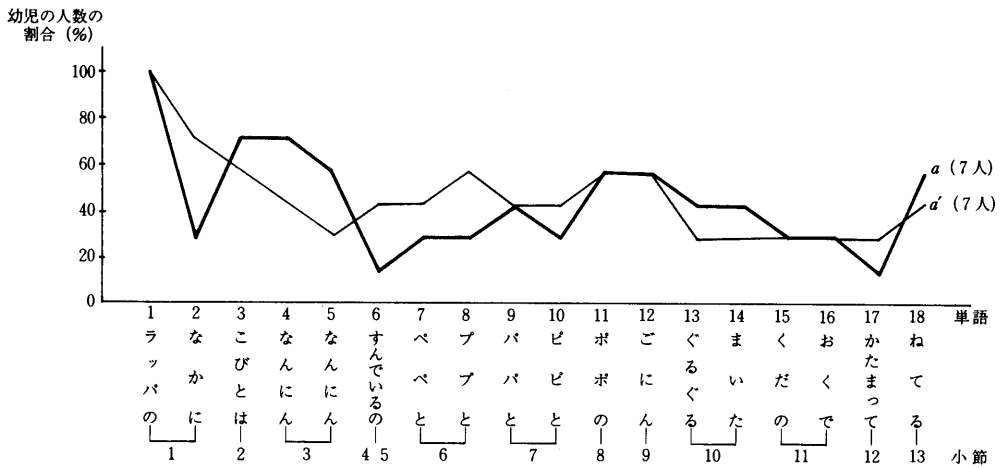


図3 「ラッパの小びと」1回目に歌詞を正しく歌った幼児 a. a' の比較

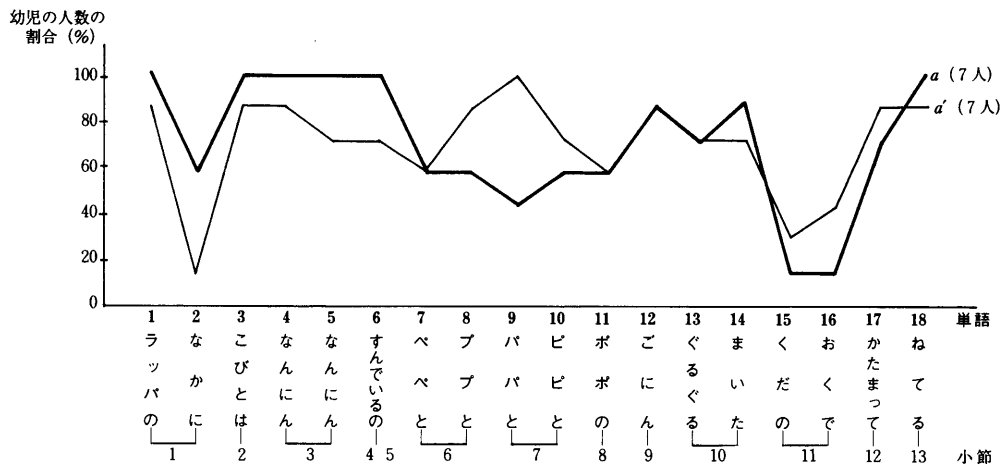


図4 「ラッパの小びと」2目に歌詞を正しく歌った幼児 a. a' の比較

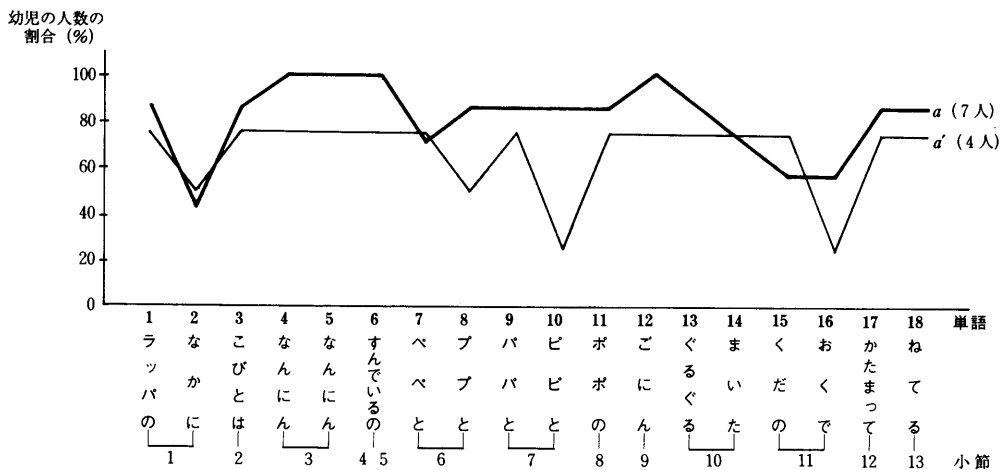


図5 「ラッパの小びと」3回目に歌詞を正しく歌った幼児 a. a' の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (1)

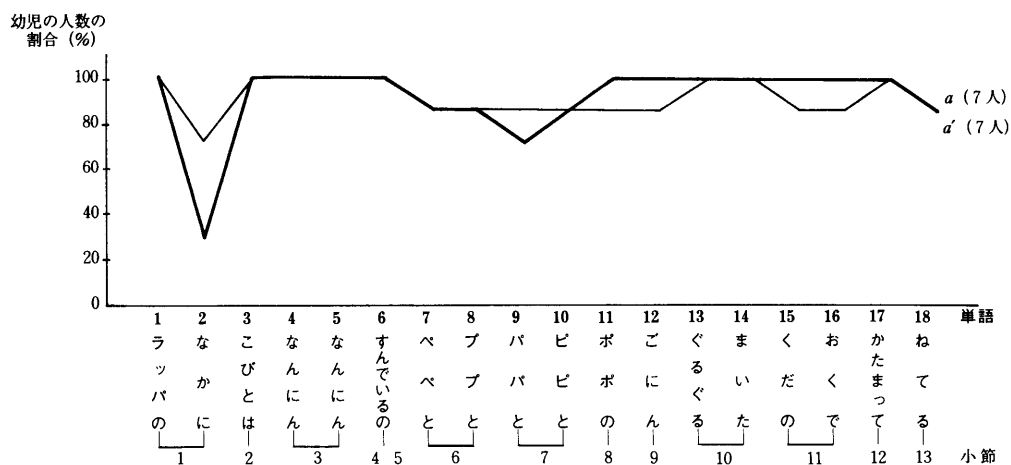


図6 「ラッパの小びと」 4回目に歌詞を正しく歌った幼児 a. a' の比較

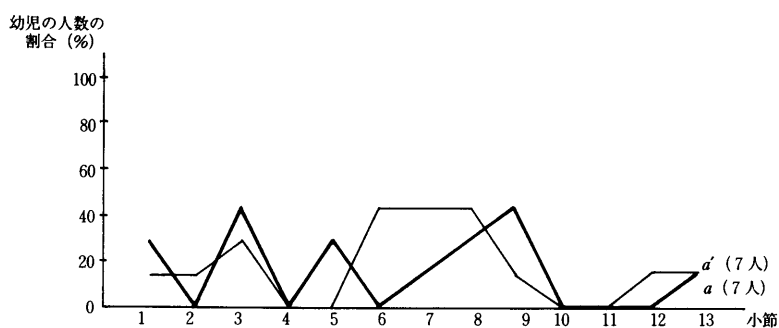


図7 「ラッパの小びと」 1回目にリズムを正しく歌った幼児 a. a' の比較

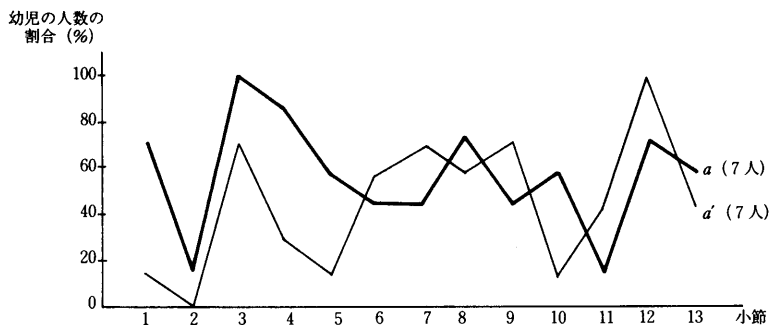


図8 「ラッパの小びと」 2回目にリズムを正しく歌った幼児 a. a' の比較

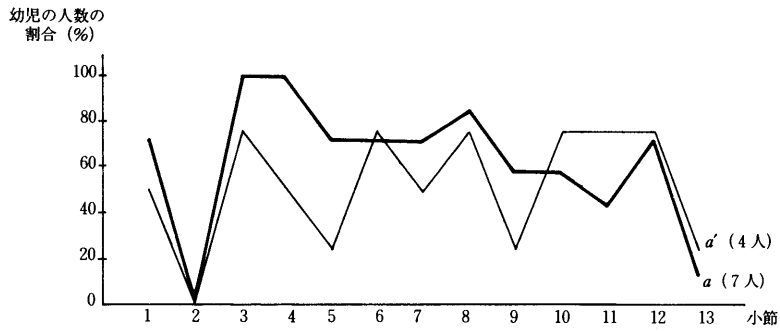


図9 「ラッパの小びと」 3回目にリズムを正しく歌った幼児 a. a' の比較

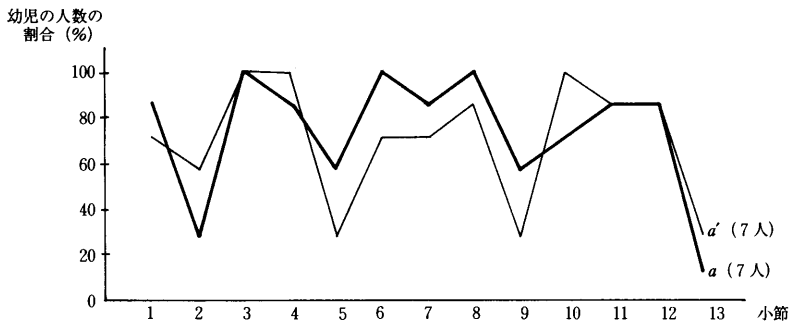


図10 「ラッパの小びと」 4回目にリズムを正しく歌った幼児 a. a' の比較

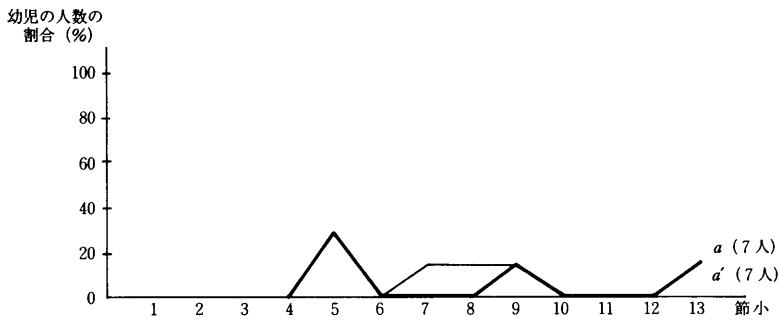


図11 「ラッパの小びと」 1回目に旋律を正しく歌った幼児 a. a' の比較

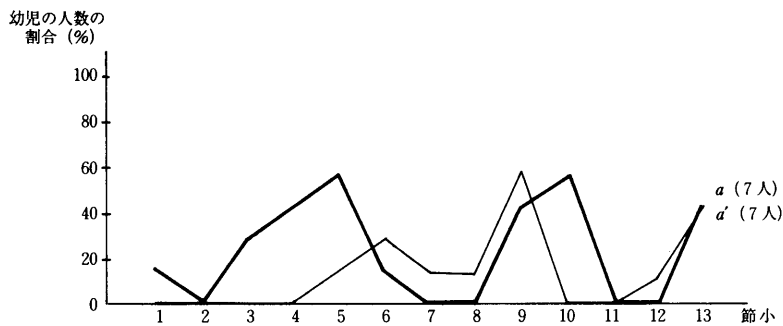


図12 「ラッパの小びと」 2回目に旋律を正しく歌った幼児 a. a' の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (1)

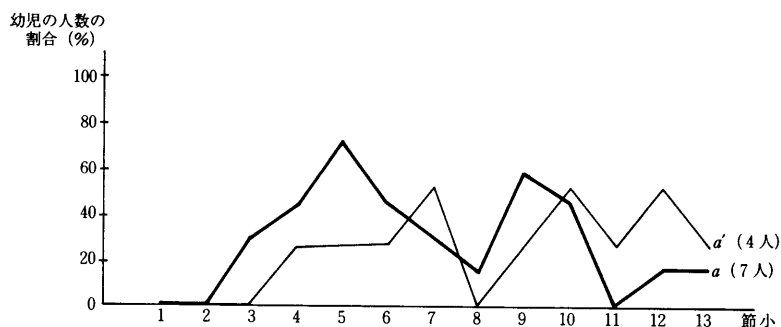


図13 「ラッパの小びと」 3 回目に旋律を正しく歌った幼児 a. a' の比較

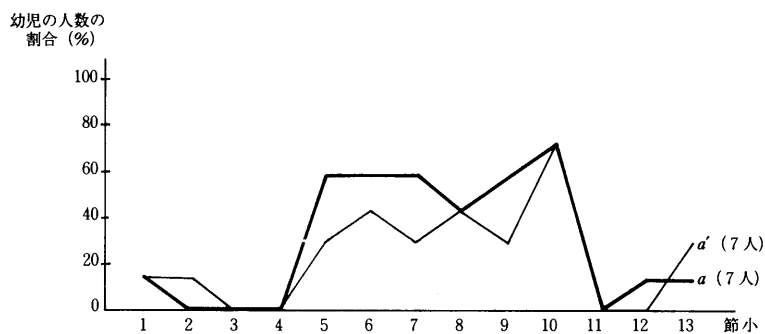


図14 「ラッパの小びと」 4 回目に旋律を正しく歌った幼児 a. a' の比較

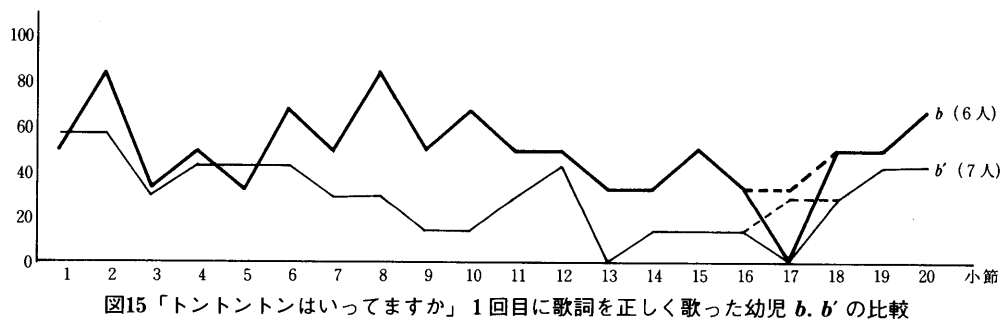


図15 「トントントンはいますか」 1 回目に歌詞を正しく歌った幼児 b. b' の比較

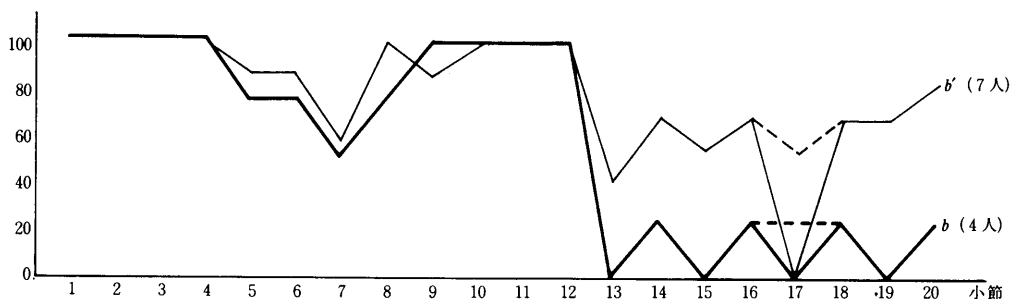


図16 「トントントンはいますか」 2 回目に歌詞を正しく歌った幼児 b. b' の比較

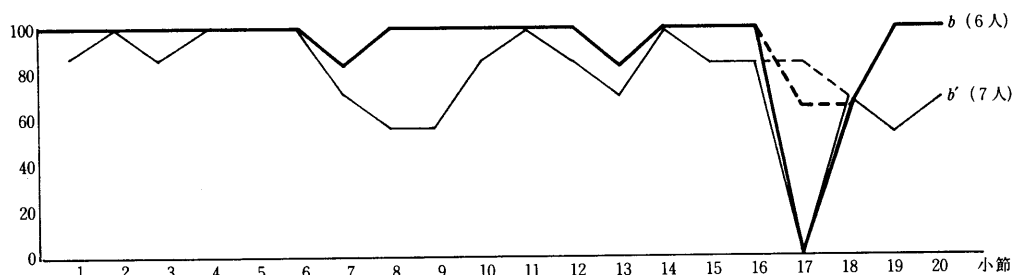


図17 「トントントンはいってますか」 3 回目に歌詞を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

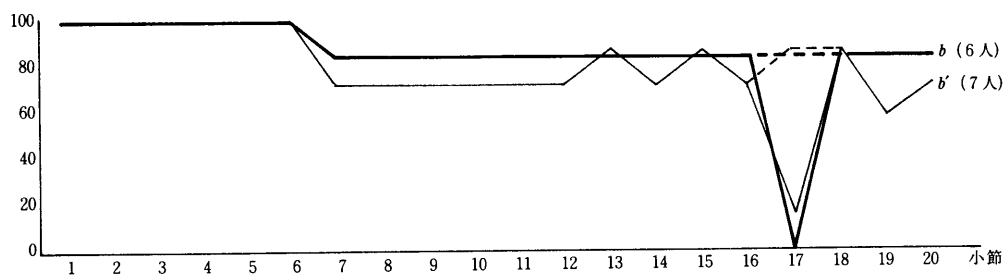


図18 「トントントンはいってますか」 4 回目に歌詞を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

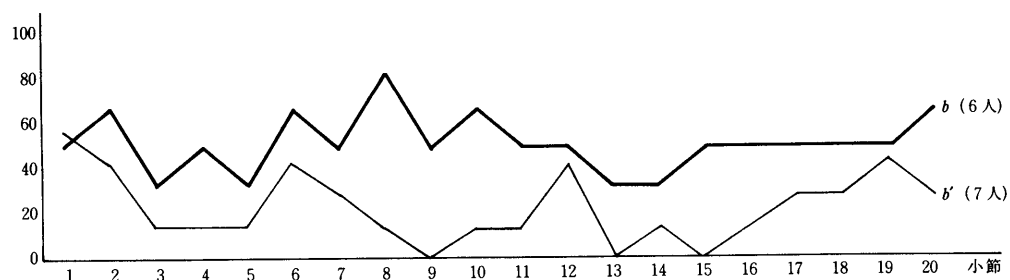


図19 「トントントンはいってますか」 1 回目にリズムを正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

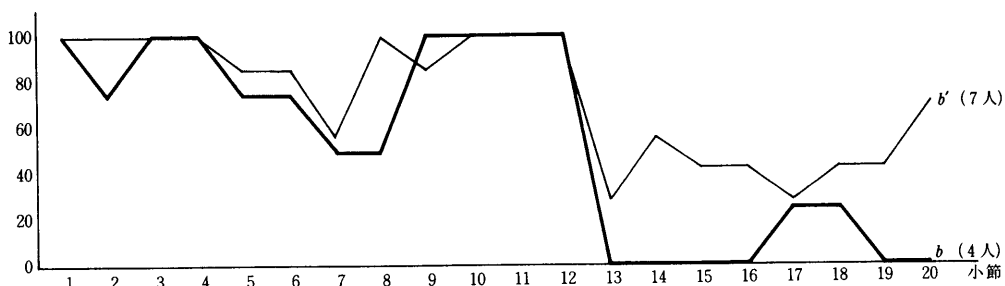


図20 「トントントンはいってますか」 2 回目にリズムを正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

幼児の歌の習得過程に関する分析研究 (1)

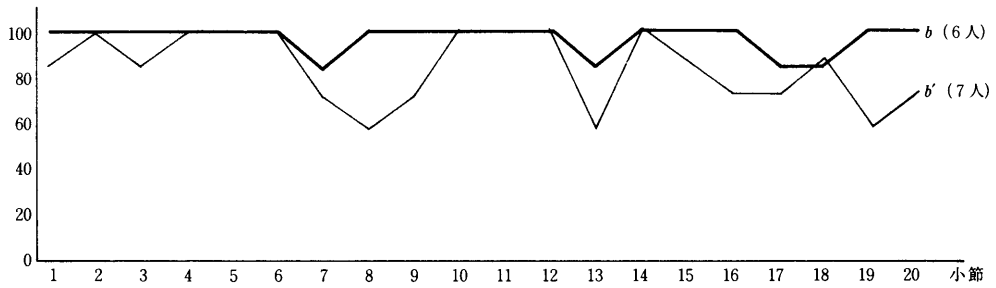


図21 「トントントンはいってますか」 3回目にリズムを正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

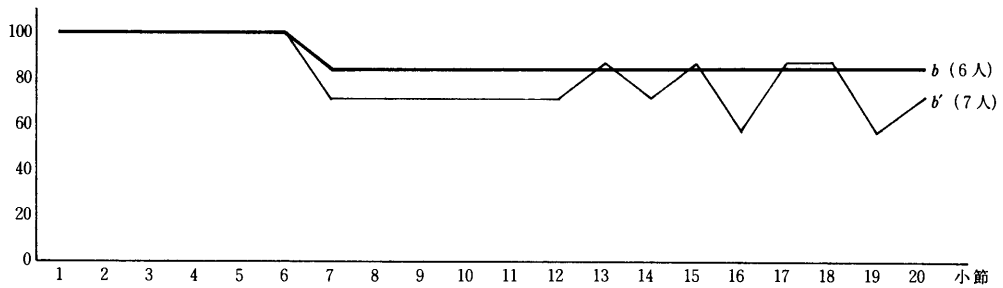


図22 「トントントンはいってますか」 4回目にリズムを正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

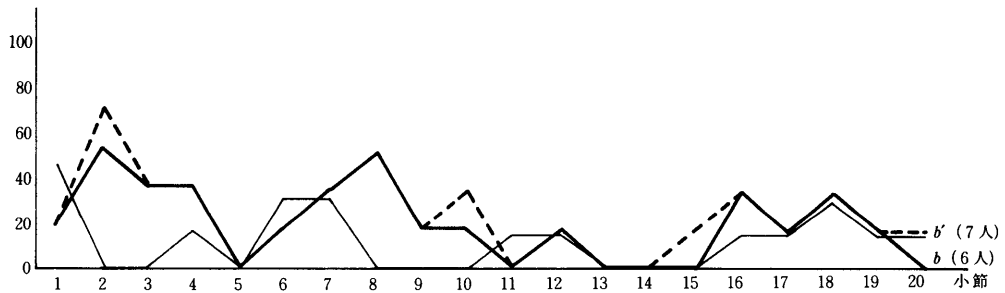


図23 「トントントンはいってますか」 1回目に旋律を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

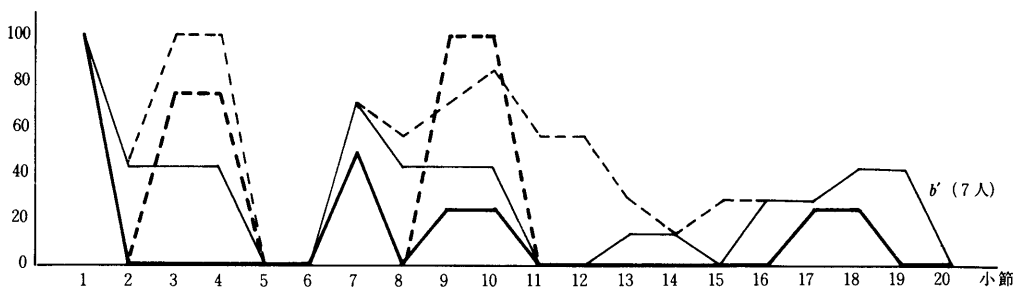


図24 「トントントンはいってますか」 2回目に旋律を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

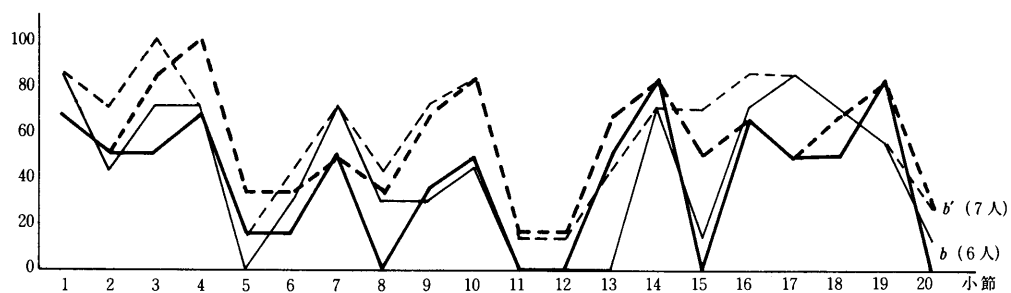


図25 「トントントンはいってますか」 3 回目に旋律を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較

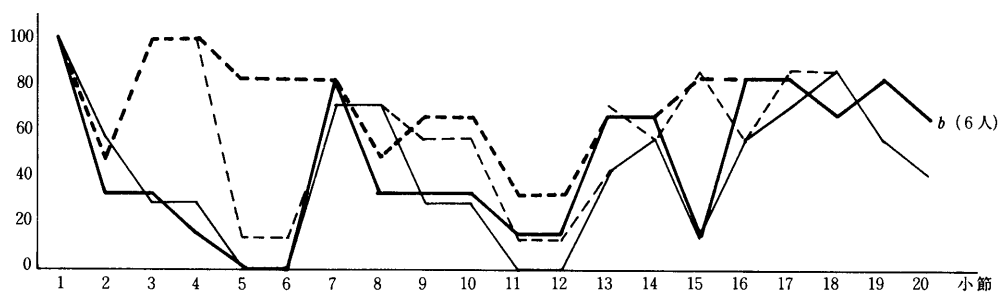


図26 「トントントンはいってますか」 4 回目に旋律を正しく歌った幼児 *b*. *b'* の比較